

**防犯教室がありました**

3月10日(水)の3校時に防犯教室が1,2,3年生を対象に体育館で行われました。  
葦崎警察署から2人の警察官が来校し、指導して下さいました。

目的は、登下校時や帰宅後の遊びの時、不審者に遭遇したときの適切な身の守り方を学ぶ、ということです。北小周辺は閑静な住宅地が多く不審者の出没は比較的少ないのですが、それでも子どもたちに尋ねると、遊んでいる時、変な人に声をかけられた、という「声かけ事案」が3件ほどありました。

警察の方が子どもたちに繰り返し話したのは、「いかのおすし」大切さです。保護者の方々もご承知でしょうが、次のような行動の頭文字を取ったものです。

- いか** 知らない人についていかない  
**の** 知らない人の車にのらない  
**お** 危ないと思ったらおおごえで助けを呼ぶ  
**すし** すぐにしらせる

警察の方の話の後、防犯ビデオを見ました。ビデオは、女の子が学校から家まで帰るまでの各場面で、何が危ないのか問題に答えながら、身の守り方を学ぶというものです。例えば、

(1)今日は急いでいるから、近道をしよう、とします。すると、「あっ、危ない」と声がします。「何が危ないのかな、次の中から選びましょう」と問いかけます。

- ①近道をすると、つまずいて転ぶかもしれない。
- ②近道をすると、変な人に追いかけられるかもしれない。
- ③近道すると、迷子になるかもしれない。

そんな内容です。ビデオの中で、「そんなことにも気をつけた方が良いのか」と改めて分かったこともありました。それは次のような内容です。

(2)家に着いたので、鍵を開けて入ろうとします。

その時、「あっ危ない」と声がします。このような時は、必ず、周りを見回し、不審な人につけ狙われていないか、周りに不審な人物がいないか、確認してから鍵を開けることが大切だそうです。そこまで神経質になる必要はない、とも思いますが、子どもの頃から、自分の身の安全は自分で守る、という意識を高めておくことは必要なことだと思いました。

その後、不審者に追われたとき、どのように対処したらよいかを、警察官が不審者に扮し、何人かの子に実際に演じてもらいました。身の守り方を学ぶ良い機会になった防犯教室でした。

**大雪で始業時刻を遅らせました**

3月10日(水)は、この時期としては予想もしない大雪となり、始業時刻を2時間遅らせての登校となりました。前日の夕方から雪になっていましたが、一晩のうちに驚くほどの積雪になりました。朝6時から教頭先生と手分けして連絡等の対応をしました。

- ①朝6時、山交バス営業所の話では、敷島・清川線は睦沢の大有(おおじも)で竹が雪の重みで道路を塞ぎ乗用車も通れない状況でした。車高の高いバスは当然通行不能なので不通でした。(6時45分には除雪車が入り、清川まで通行可能になりました)
- ②市内の小学校(中学校は卒業式なので平常通り)では、竜王の南部3校は前日(9日)の午後10時に1時間遅れを決定しました。
- ③本校でも1時間遅れか、2時間遅れかで迷いました。本校の場合、バス通学児童のことを考えると2時間遅れの方が混乱が少ない、と判断しました。(判断理由としては、大雪のため道路が渋滞し待ち時間や車内での時間が長くなると児童の負担が大きい。2時間遅れの方が道路の渋滞も少ないと予測しました)

○甲斐市内の11の小学校の様子ですが、敷島南小が平常日課で、他の9校は1時間遅れで対応しました。本校も1時間遅れでも良かったか、そんな気持ちもありますが、山間部の状況を考えて、今回の判断で良かった、と考えています。

### 学びの意欲を持たせるには

私たち親は、わが子が勉強している姿を見ると安心するところがあります。子どもが机に向かい何時間も教科書を開いている姿を見ると心が落ち着きます。私たちは、一般に、子どもが机に向かう時間を重視します。学んだ内容がどれだけ理解できたか、については考えません。これは次のような理由からです。

- ・時間をかければ、少しずつだが、学んだことは頭に入ってくる。
- ・個人差(能力差)はあっても、1時間の学習は30分間の学習に優る。

果たしてそうでしょうか。確かに、学問には「読書百編、意自ずから通ず」(分からないことでも、何度も繰り返し読むと自然に分かってくる)という側面はあります。ですが、私たちは、学ぶ時間を重視する反面「学びの質」「学びの意欲」を見失っているように思います。このことで、以前聞いた話を思い出しました。

江戸時代の学者で政治家の勝海舟(かつかいしゅう 後の軍艦奉行)の話です。貧しい旗本であった海舟は若い頃、蘭学(オランダの学問)を熱心に学んでいました。そして、どうしても読みたい、という本に出会いました。ですがその本はたいそう高価で、貧しい海舟には買うことが出来ません。そこで、その本の持ち主の旗本を訪ね、借りることが出来ないか、お願いしてみました。ですが、高価なものですから、当然断られました。それでも、あきらめきれず何度もお願いしました。その熱意に負け、持ち主は、次のような条件で本を見ることを許してくれました。

- ・貸すことは出来ないが、私の家に通い、私が読まない寝ているときに読むのなら、良いでしょう。

海舟は小躍りして喜びました。海舟はその本を写させてもらうことにしました。写すとしてもコピー機などない時代です。手書きです。また、通う、いっても車もない時代です。簡単ではありません。片道3里の道を毎日歩いて往復します。自分の住まいから片道3時間かけその旗本の屋敷に行き、写し、帰る、という生活を続けました。6ヶ月ほどで海舟はその本を全部写すことが出来ました。そして、写し終わった日に、丁寧にお礼を言いながら、読んで分からない所があったので、持ち主に尋ねました。

「実は、私にはどうしても分からないことがあるのです。この本の△△の所に○○と書いてありますが、このことはどういうことなのでしょう。」

と、教えを請いました。すると、その本の持ち主は次のようにいいました。

「いや、お恥ずかしい話だが、実は私はこの本をまだ読んでいないのです。私は、あなたの熱心な学問への姿に本当に感銘を受けました。この本は、私など持っても宝の持ち腐れです。あなたのような方が持ってこそ、生かされるというものです。」

と、言ってその高価な本を無償で譲ってくれました。

さてここで、海舟の学問への意欲、その底知れぬ学問へのエネルギーはどこから生まれたのか考えてみましょう。世界中の教育学者が考え、答えが出せない「学びの意欲の喚起」という難問に迫りたいと思います。海舟の話からは、次のようなことがヒントとして見えてきます。

○不足は意欲の母である。

・本を読みたい、勉強したい、という強い気持は読みたい本が読めないところから生まれました。足りないことが逆に意欲を高めることがあります。

○一見すると無駄と思えることが意欲を高め、深い理解に至る。

・本を読むために通う3時間の時間は、普通なら無駄です。ですが、その通う時間に海舟は本を読む気持を高めます。思いを巡らせます。帰りの時間には読んだことを反芻します。それがより深い理解に導きます。

○自分が好きなこと、興味があることは苦にならない。

・言い古されたことばですが「好きこそものの上手なれ」ということでしょう。海舟は、鎖国で閉ざされた国内から、世界を知りたい、という気持を膨らませていました。多くの日本人が同じ状況なのに、海舟だけが特に強く思ったのはどうしてでしょう。それが個人差です。海舟とは違い別のことに興味があり大きな仕事を成し遂げた人もいたことでしょう。そのように考えると、自分は何が好きか、何に興味があるか、自分自身を知ることは大切なことです。